

幼児教育における「表現」の意義に関する研究
—フレーベル幼稚園の実践を通して— (その3)

A Study on The Meaning of “Expression” at Kindergarten Education (3)
—Based on Focusing The Practice at FROEBEL KINDERGARTEN—

藤 井 恵美子* (平成24年2月14日受理)

要約

フレーベルの『人の教育』の中から表現に関する論説を手がかりにし、幼児期の表現を探り、ドイツのフレーベル幼稚園の実践を表現の視点から考察した。このことを踏まえ、幼児教育における保育内容「表現」の意義と今後の課題と展望について明らかにしたいと考える。

キーワード：フレーベル、表現、恩物 (Gabe)

keywords : Froebel, Expression, Gift

1. はじめに

フレーベル幼稚園における表現の意義について、前々号ではフレーベル幼稚園のヘーン園長に、前号ではフレーベル博物館のロックシュタイン館長にインタビューを行い、考察を行った。

子どもたちはものや出来事を媒介にし、また人とのかかわりにおいて理解力を深め、表現力を高めていくのである。子どもたちの表現しようとするものがおぼろげだったりする場合には教師が適切な言葉かけをして、子どもたちの表現の過程を支え、子どもたち自身が表現する喜びを見出し、いけるようにすべきである。そのためには教師は子どもと共に生活をし、子どもの表現を支える力量を持たねばならない。

本号ではフレーベル幼稚園の保育実践を観察し、子どもたちが遊びの中でどのように表現活動をしているか、また教師の援助がどのようになされているのかを検証していきたい。

2. フレーベル幼稚園の実践から

フレーベルの思想を今も尚、継承発展させながら保育に取り組んでいるフレーベル幼稚園の実践を観察した。遊びの中でどのように子どもが表現活動をし、教師がその表現に関する援助(支援・指導)をしているのかを検証した。

3月末、バートブランケンブルクはまだ寒く、前々日の夜には雪が降り、明け方まで雪が残っている天候であった。バートブランケンブルクにあるフレーベル幼稚園は長い歴史にも支えられ、地域に密着した幼稚園である。

保育参観については下記の通りである。

- | | |
|-------|---|
| 1 日 時 | 平成21年3月27日(金)
午前8時~10時
8:00 随時、登園
朝食
自由に遊ぶ
9:15 朝のあつまりにおける遊戯
9:30 積木遊び
10:00 外遊び |
| 2 場 所 | ドイツ チューリンゲン州 バートブランケンブルク市 フレーベル幼稚園(5・6歳児 22名) |
| 3 内 容 | 現在のドイツでのフレーベル理論に基づいた保育について、その実践方法と理論の具体化と課題について、特に「表現」の観点からまとめ考察した。
保育観察と担任の保育観について質問 |

(*ふじいえみこ 保育科准教授 幼児教育学)

4 方法 保育観察をビデオに収録し、その後文字化し要約した。担任教諭の説明を交えて分析をおこない考察をすすめた。

5 指導者 Hannelor Beyerlein 先生

(1) 朝のあつまりにおける遊戯

フレーベル幼稚園での朝のあつまりの保育観察及び担任の Hannelor Beyerlein 先生へのインタビューから遊戯に関する分析を試みた。

フレーベル幼稚園の5歳と6歳の子どものクラスを観察した。子どもたちは折り紙あそびや絵を描いて遊んでいる。机の上の小瓶に花が飾られている。窓際の棚には、鉢植えの花がいろいろ並んでいる。自然との関わりを大切にしている現れであろう。

8時30分に朝ごはんをとる時間である。それまでの時間を子どもたちは自分のしたいことをして遊んでいる。朝のあつまりでは身体表現をする場面を観察することができた。

<事例1> 朝のあつまり

- ・ 子どもと先生と一緒に手をつないで輪になる。①
 - ・ 「今日は、多くの子どもたちが病気でお休みしています。」②
 - ・ 先生と子どもと一緒に歌を歌う。「フレーベルの歌」③
- (以下参照) AWO-Kindergarten “Froebelhaus” 児玉 斗訳 要覧¹⁾より

Kommt Lasst uns unseren Kinderen Leben

さあ 私たちの子どもらに生きようではないか

わたしたちはフレーベルの子どもたち

わたしたちはみんな月曜日の朝に
ここに集まることが嬉しいんだ
愉快地遊ぶことは
大きな子にも小さな子にも
楽しいんだ

火曜日は遊戯の日だ
難しく思えるかもしれないけれど
ステップが上手くいったら
拍手喝采なんだ

水曜日はビートの木を育てるんだ
わたしたちはもういっばしの庭師なんだ
雑草を引っこ抜き掘り返し水をやり
こうすることで実りは豊かになるんだ

わたしたち フレーベルの子どもたち
わたしたち フレーベルの子どもたち

木曜日は スポーツの日だ
みんなで体育館に行って
トゥルネンをする
遠くはないよ

金曜日はサウナに入ったり
ハイキングをしたりする あるいは
工作したり組み立てたりよじ登ったり
ここでは何でも素晴らしい

週末が再びやってきて
私たちは がまんできないんだ
月曜日が待ち遠しい
わたしたちの
フレーベルハウスが待ち遠しい

わたしたち フレーベルの子どもたち
わたしたち 楽しいんだ！

T 「おはようございます。」④

T 「遠い国 日本からお客様が来られました」⑤

- ・ 子どもたちは少し離れたところで参観していた筆者の方を向いて、挨拶をしたりなにやら子どもたち同士で話す姿があった。

(Tは教師、Cは子ども)

<考察>

①については、子どもと先生と一緒に手をつないで輪になって、歌を歌ったり、しゃべったりすることで、子どもと先生を結びつけ、そのことが与え、与え返される関係であるととらえた。まさしくロックシュタイン館長が「円がすべての基本であって、円は最重要なのです。みんな一緒に動くと言明しなくてもできるでしょう。」といった言葉通りである。子どもたちは落ち着いてまた、自分で思ったり考えたりしたことを表現し、他の子どもたちも先生も聞きあう姿が見られた。

②については、先生がお休みの子どものこと、そして先生方もインフルエンザでお休みのことを子どもたちに話をする。輪になって先生が話すことで、子どもたちも先生の話す言葉の意味をよく理解し、また、先生が、休んでいる子どもの心配をしている様子から、子ども自身も相手がどんな気持ちであるかがよくわかっているのである。

③については、毎朝子どもたちはフレーベルの歌を歌い、先生も一緒に手をたたいて動作をしながら、一週間の歌を歌っている。歌詞の中に「火曜日は遊戯の日」と子どもの生活の中に位置づけられていることがわかる。また、水曜日は植物を育てることの喜びを唄っている。

フレーベルの歌はまさしくキンダーガルテンでの生活がよくわかるものである。特にリフレインでは幼稚園の子どもであることの喜びがよくわかる。この歌を子どもたちは先生と輪になって楽しげに歌っていた。

④については、輪になってフレーベルの歌を歌い、動作(遊戯)で示すことで、きょうもフレー

ベル幼稚園でお友達と楽しく遊ぼうと表情が生き生きしている。先生からの温かい呼びかけや挨拶で遊びが始まるのである。

⑤については、先生が参観者のことを子どもたちに紹介し、「遠い国日本」は、どこまで子どもにわかっているのかは定かではない。しかし、今、わからなくても日本という国を知ったときに、遠いという意味がわかるのであろう。朝の先生と子どもの会話は、家庭のこと、幼稚園のこと、友達のこと、そして日常の出来事などを話し、先生と子どもの関係そして両者を通じて周辺の人々との関係をつないでいる。

朝のフレーベルの歌から幼稚園生活は始まるのである。子どもたちが先生と一緒に遊戯を交えて歌い心を開放して遊びに入っているようであった。

遊ぶこと、または遊戯は、幼児期における人間の発達、すなわち子どもの生活の最高の段階であり、遊戯とは子どもが自己の内面を自ら自由に表現したもの、自己の内面的本質の必要と要求とに応じて内面を外に表したものであり、遊戯は、幼児期に於ける子どもの純粋な精神的生産であり、また同時に、人間全体の規範ともいべきものであるとフレーベルは述べている。

(2) 積木遊び

朝のあつまりの後、子どもたちは思い思いの場所遊びはじめた。遊びが見つからない子どもはいない。レーゲンマテリアルやトランプやゲームなどで遊ぶ子ども(写真1)、積木遊びをする子ども(写真2)に分かれた。

積木は、保育室の隣の部屋にある。担任の先生



写真1) 先生と一緒にトランプ遊び



写真2) 積木遊び

と子どもたちとの積木遊びを観察し、それに基づいて、積木遊びの30分を分析し、考察した。

じ共通のイメージを持って構成遊びをすることについてはやや疑問を持つところである。

<事例2> 話し合い

- 先生と一緒に数人の子どもが窓の外を見に行く。①
- T 「家の前に何が見える？」
- C 「塔が見える。」
- 子どもと先生がその場で話し合っている。少し離れたところで観察していたため、やりとりの内容はこの時点ではわからない。
- 話し合いの結果、積み木の部屋へ先生と子どもが移動（女の子一人、男の子4人）する。
- みんなで窓から見えるグライフェンシュタイン城を作ることになる。（写真3）

<考察>

子どもたちは、今日遊びたいことを自ら選び、作りたいものを自ら考えて遊びをはじめた。保育室の窓から毎日見ているグライフェンシュタイン城を作ることになったのである。このお城は、子どもたちが、日頃、散歩によく出かけている。また地域に親しまれたお城でもある。

①については、教師が本日のねらいを持って、子どもと話し合いその中で子どもが遊びたいことを自己決定している姿が見られた。グループで同

<事例3> 積木遊び（長い積木・短い積木）

- 積み木を出し遊びは始める。
- T 「場所がないから・・・なさい」①
- 長さを比べている。長いのと短いのを合わせて作り出す。②
- T 「横にするとぴったりするよ」③
- 長方形にきちんと並べる。④
- T 「塔を作っていきましょう。」⑤

<考察>

①については、子どもたちは教師の声かけで積木の長短に気づき、工夫しながら長さの調節をしていた。計数の能力を子どものうちに発達させるには、日常生活のなかにその要求が子どもの中にあられるのに応じて伸ばしていくべきである。計数の能力が形成発達すると子どもの知識範囲は広がってくる。子どもの生活の世界、その内部的生命の本質的要求、憧憬などは満足させられるのである。まさしく今、子どもたちは積木の長さを調節して、お城を構成していく喜びを感じている。そのためには教師も一緒に積み木遊びをしながら子どもに気付かせていくことが重要であることがわかった。

<事例4> 表現を見直す

- T 「窓から見た塔ですよ」①
 T 「丸いのは塔ね」
 T 「ちょっと よく考えてごらん下さい。
 塔(入口?)はどっちが上にあったの?」
 T 「よく考えてごらん下さい」②
 T 「入口はどっちにあったの?」「入口は
 どこにあるの?」
- ・ 先生と子どもとのやり取りがしばらく続
く。
 - ・ 子どもたちは作り直すことになる。

<考察>

①については、今日は窓から見たお城をみんなで作る、ということ子どもたちに再度、意識させている。そこには、建物を注意深く見ることが幼稚園生活の今までの遊びの中で子どもの心に届いているように見えた。

②については、「よく考えてごらん下さい」という教師の言葉かけで、子どもたちは実際見たお城を思い返している。塔がどちらの方向にあったのかを思い起こし間違いに気がついている。子どものおぼろげなる記憶を呼び覚まし、確かな真実を見る目をここでも育てられている。そのことで、子どもたちは表現を見直し、子ども自身で自己決定し、やり直すことになった。子どもの思いのままの表現をそのままにしておくのか、または先生



写真3) 幼稚園の窓から見えるグライフェンシュ
 タイン城

の言葉かけで子どもが思い返し表現を見直すかは、みんなでお城を造る過程においては重要なことになる。なぜなら、それぞれが思い思いに作っていると共同作業は成り立たないからである。みんなイメージを共有し、互いの表現を見ながらさらに、自分らしさを出して表現することになるのである。

<事例5> 教師のヒント

- ・ 先生が門を2本立てる。①
 - ・ 子どもたちはそこから積木をつなげて、
また積みながらお城を造り始めた。
- T 「ちょっと高く積み上げてごらん」②
 子どもたちはそれぞれ塔を積み上げる子ども、部屋を積み上げる子どもがいる。
- T 「窓をどうするか考えてごらん下さい」
 ③
- ・ 子どもは窓を作る。
- T 「窓を作ってごらん」
丁寧に積み上げるよう先生が行動で示す。
 ④
- T 先生が積木の箱を持ってくる。⑤

<考察>

①については、教師が門を2本建てるという具体的な行動を示し、子どもにヒントを与えている。そのヒントから子どもたちはお城を思い起こし、また空間のイメージを拡げて表現をし始めている。教師が子どもと一緒に活動することでの的確なヒントを子どもに提示しているのである。

②については、教師は横の広がりから高さへの気づきを今度は言葉でヒントを提示している。教師自身がお城のイメージを把握できているからこそ、的確なヒントを与えられるのである。教師のヒントを受けて子どもたちは横への広がりから次にお城の高さに気づき上へ高く積木を積み重ね始めた。

③において、教師が次への課題を子どもと共に遊びながら自然に言葉をかけることで、「ああ、そうだ窓があった」と自然に気づかせていた。決

して強要したり、強制したりする言葉ではない。

④については、窓をつくる難しさを教師はよくわかっているため、まず教師自身が慎重に窓の周辺を積み始めた。子どもたちも教師が行動で示したヒントを見て、慎重に積み始める姿が見えた。みんなでつくっているお城なので、崩してしまわないように考えているのである。

⑤については、子どもたちが本当に真剣に一生懸命お城を造ることに専念している。時々、子ども同士で話し合ったり、相談していたりしている姿が見られる。それぞれの子どもが、塔、窓の周辺、それぞれの部屋など、自分でつくりたい箇所を黙々と楽しんでつくっている様子が見られた。

すべて子どもの思うがままに活動している様子であるが、教師のヒントで子どもたちはお城を造る過程を楽しんでいる。このように教師のヒントが子どもの表現を豊かにすることができるのである。また、表現する過程で子どもたちが思考すること、観察すること等、表現の意義が明らかになった。

<事例6> 自然について気付かせる

T 「ほら見てごらん、太陽がさしてきましたよ」①

- 子どもたち、一斉に少し高い位置にある窓から射す太陽の光に気付く。

<考察>

①については、朝はどんより曇っていたが、太陽が窓からさっと射し込んだその瞬間、教師が発した言葉は子どもの心に届いたようである。このように、その場、その瞬間に起きた自然の出来事を捉える教師の感性が、日々の生活の中で子ども一人一人が感じ表現することに繋がっていることがわかった。

<事例7> 教師の認め

C 「先生できたよ」

T 「よくできたわね」①

- 長さがうまく合うようにさりげなく先生は短い積木と長い積木を入れ替える。②
- 積み木を壊すことなく上手に積み上げる。
- 四角い部屋と塔、窓、入り口

T 「最後の一行ですよ。どっちからも一行ね」③

T 「屋根をどうするか考えようね」④

- 子どもが長さを比べている。すこし足りない長さの積木と少し長い積木の長さを教師は比べてちょうど合うのを子どもに気付かせる。そして屋根上をうまくふさぐことができた。⑤
- 塔のほうも小さい積木をうまく円筒にして積み上げていく。⑥
- 先生は部屋の中へ入る太陽を調節し、子どもにいいかたずねる。⑦
- お城のようにうまく積み上げていく。子どもたちはお互いにしゃべりながら作っている。何かを木曜日は遊ぶ日だ、など話している。⑧
- 頂上が高く素晴らしい塔が出来上がる。

<考察>

①については、子どもが完成した喜びを伝えていた。それを受けて教師は認めの言葉を子どもに言っているのである。認められた子どもは満面の笑みを浮かべて得意そうにまた教師に認められたことでさらに次への表現の喜びと自信を持ったことと考える。

②については、教師も一緒にお城作りに参加することが、次の活動（表現）、つまり子どもの表現をさらによりよくするための手助けをしていることがわかった。今は教師が手助けをしている段階であるが、このことが子どもたちにとっては次の遊びへ繋がるものなのである。そして、ポイントを教師が手助けをすることで、子どもたちは積木を壊すことなく、上手く積み上げていく喜びを

実感している。

③について、子どもたちは教師の言葉かけで目標を明確にし、慎重に、壊さないように積み上げている姿が見られた。

④については、教師の認めの上、さらに屋根の部分はどうするか次の課題に向かって考えている。

⑤において、表現していく過程で長い積木と短い積木をどのように組み合わせ屋根を表現していくか子どもたちは試行錯誤を繰り返しながら取り組んでいる。教師は積木の長短を比較することでちょうど長さが合うものを子どもに気づかせていた。そして、屋根が上手くふさがったことを教師はしっかり認め子どもたちは次への表現活動へ取り組んでいた。

⑥については、円筒の難しい屋根は子どもたちが小さい積木を重ねながら自分たちで工夫して作り上げる姿があり、教師の手助けはあまり見られなかった。

⑦については、朝から曇り空だったが、急に少し高い窓から太陽が射してきたのを教師が気づき、積木遊びに熱中し気づいていない子どもたちに、声をかけていた。何気ない日々のこのような自然の気づきを保育の中で意識することが重要なことと考える。

⑧については、子どもたちは難しいことに挑戦し、完成も近くなった頃、日常的なことを友だちと話しながら積木遊びを楽しんでいる姿が見られた。毎日朝のあつまりで歌っている「フレーベルの歌」が子どもたちの中に根付いていることが確認できた。

<事例8> お城の周辺をつくる

—遊びを広げる—

- お城の周辺を作り出す。先生とやり取りをしながら作っている。塔を積み上げている。木を置く。たくさん木。先生と話しながら友達と話しながら実によくしゃべる。

T 「お城の周囲に何がある？」① (写真4)

C 「ベンチがあって、まわりに橋があって、動物がいて」

などと話しながら、それらのものを置きます。

- 塔がだんだん高く積みあがってきた。お城の周辺を作っている子どもと分かれて完成へと向かっている。② (写真5)
- 子どもたちはお城をよく知っている。塔の上から下を見ている人をおく。③
- そこへもう一人の先生がグランフェンシュタイン城のできあがりを見て感心する。
- 違う遊びをしていた子どもたちも、みな驚きの声を上げ感心する。④
- 教師同士が何やら話している。子どもに質問をしている。
- 積木を始めてから30分ほど経ち、子どもたちの集中力が切れてきた。教師が子どもたちに話す。引出しから人形をもってくる。お城のあちらこちらに置く。⑤
- 出来上がった作品を教師と子どもたちが話し合いながら見ている。⑥
- 残りの積木をそれぞれ片付ける。

<考察>

ここでは、教師や友だちとイメージを共有しながら一つのものを作っていく過程でものや人や出来事との関係の中から表現する力が培われている。

①において、教師の言葉かけで子どもたちの遊びは、お城のみならず、お城の周辺のことを思い浮かべ表現を豊かにするきっかけとなる。そして、教師の言葉かけからお城周辺のことを子どもたち



写真4) 教師からのヒント

みんなで話し始めている。このことは、表現することで、子どもたちの地域のお城をよく知ることとなり、社会の広がりにもなったと考える。いかにお城を立派に建てるかということではなく、その過程で様々なことを気づかせより正確にものを見る力が養われていることとなる。そのことが子どもの社会を拓げることにもなる。

②については、子どもたちは、お城をみんなで造っていたが、お城の周辺へと表現が広がってくると、お城を造る子どもと周辺を作る子どもに別れてきた。誰にも指示されず、黙々と遊びに没頭している。思い思いにイメージを拓げて表現している。教師の言葉かけで子どもたちの表現する意欲をさらに高める一助となっている。

③では、子どもたちは日頃からよくお城へ散歩に行くことで、塔の上から街並みを見下ろしている人々の光景を目にしているのだろう。また、子ども自身の姿として人形をおいてもいるようである。表現とは子どもが経験したことを表すことであり、また、よく見て理解し認識することであると改めて捉えることができた。

④については、ほぼお城が完成する頃、他の遊びをしていた教師と子どもたちがやってきた。子どもたちは、驚きの声をあげ見ていることを嬉しそうにしていた。人に見てもらおうという行為は、子どもたちが次のものへ挑戦する表現意欲を高めることとなるのである。満足そうな子どもたちの表情からそれは窺えるものであった。

⑤については、「完成！」と実感できることを



写真5) 完成に向けて分担作業して遊ぶ子ども

教師は子どもに味わうことを大切にしている。集中力が切れてきてはいたが、もう少し頑張ろうとする子どもの気持ちが見えた。その気持ちが達成感や充実感につながることとなり、表現する喜びにもつながっている。このことはまさしく人として生きる源になり、表現の意義であると考えられる。

⑥については、話し合いは、子どもたちと先生が共に作り上げた喜びと、作り上げるまでのプロセスでの出来事を個々に振り返る場と時間であった。作品への個々の思いが表現することの意義にもなると考える。

子どもたちの遊びを観察し、その中で疑問に感じた点について、保育が終了後、担任の先生に質問したことを以下述べる。

質問1 積み木遊びは、このあと子どもたちはどうするのですか？

- 今日、作ったものは帰りに片づけるわけでもなく、来週まで置いておいても構わない。①
しかも子どもたちだけでさらに発展させたり、さらにほかの子どもたちに見せたり、結構自慢しているので、さらに発展することができるでしょう。②
- 十分満足したら、完全に新しく新しいものを作ったりもします。③
ちょっと時間がかかりましたが、一つ建物が完成しました。④

<考察>

①については、片付けることも子どもの自己決定である。積木の部屋があるためそのままにして、帰っても支障がない施設環境になっているのである。

②については、今日の遊びから明日の遊びへ連続性があり、表現を豊かなものにしていくことと捉えられる。さらに、表現したものを教師や友だちに見てもらうことは表現力を高め、自信につながっていくのである。

③については、子どもは満足感を持つことが大切であること、つまり十分遊び、教師や友だちに認めてもらうことで、さらに次への意欲を持つことになるのである。

④については、教師自身が今日のねらいを持ち保育したことへの自己評価の一助であり、日々の保育の振り返りとなり、教師自身も次の子どもの遊びへの見通しを持つこととなる。教師の保育の省察の重要性と捉える。

質問2 なぜ、今日の遊びなのですか？

- 今日、朝のあつまりの後で今日は積木遊びをしたいですか、レーゲンマテリアルやトランプで遊びたいですか、と聞いて子どもたちが自分で遊びを選んだのです。
- 今日は何かを建てることを学ぶ。長さを図ること、さらにたんに積み重ねるだけではなく接合部を重ねておいていく。さらに長い積木と短い積木とを組み合わせていく、ということをして今日は「ねらい」として保育をしました。①
- 窓から外を見たときに子どもたちが、今日はグライフェンシュタイン城を建てようと言ったのです。②
- いろいろな指示は与えるけれども、何を作るかという決定は子どもたち自身が決めるのです。③

<考察>

①については、今日の保育の「ねらい」は何かを建てることを学ぶことである。その「ねらい」を達成するため指導する内容として、長さを測ることや接合部を重ねておいていくことさらには長短の積木を組み合わせていくことであった。保育計画の重要性を明らかにした保育実践であったと考えられる。

②については、子どもたちが幼稚園の外の社会を認識していることがわかる。それらを保育の中へ取り入れている。また、社会を取り入れると言うことはものを見る観察力が育っていることと捉える。

③については、教師はただ子どもを見守るだけではなく、いろいろな指示、言い換えれば教師がいろいろなことを提案はするがあくまで決定するのは子どもであり、自己決定することの重要性を教師は強調している。ただし、教師の説明で理解はできたが、説明なしでは教師自身が指示していると捉えられかねないと思う。

質問3 ねらいについて

- 今日の課題は大勢の子どもが現実の建物を建てるというのが課題であった。他の日には、一人とか二人の子どもたちだけで何か作る。たとえば、作る対象は、今日は現実の建造物だけれども、空想上の冒険のなかに出てくる冒険物語の中のお城を作ったりということもある。ただ、今日の課題はあくまで現実の建造物であって、そこを見てグランフェンシュタイン城を選んだのです。①
- 助けを与えて、子どもたち自身が作っていくのです。それは相互作用です。②
- 今日の課題はこれ、あくまで今日の課題は大勢でやることです。また、別の日は何かを作るのではなく、折り紙をしたり、切り紙をしたり、大勢ですることもあります。一人で活動することもあります。一人が折り紙をして、その隣で積み木遊びをすることもあります。基本的には先生は子どもが自分でやることを助けること、導いて、助長する、援助する、促進する。子どもたちをその方向へ導いてやる。それが教師の仕事です。③
- 今日は先生がいましたけれども、難しいものを作るので先生が教えなければならぬ。今日の課題がそういう風なものだからそうであって、常に先生がいるとは限りません。④
- 子どもたちが一人で遊んだり、二人で遊んだりするのをときどき見たりします。子どもたちはこの廊下を自由に行き来して自由に好きな遊びをしています。ただ、それはあくまで子どもたちが5歳6歳児であって、3歳児やそれより小さい子どもは、一人先生が常に見ています。⑤
そうなると、小さい子どもたちの場合は大きな部屋が一つなのでそれは可能です。しかし、大きな子どもたちの部屋はいく

つにも分かれています。

今日はお客様のために見せなければいけない、という面もありました。(先生笑う)

何か大きなものを建てる。何らかの助言を与えて教えなければならぬ。ここに窓がある。長さを、高さをなど、そう示したのです。⑥

<考察>

①については、今日の遊びの課題が明確である。前後の遊びの流れから、建物を建てるという課題になったと考えられる。

②については、教師は確かに遊びの流れの中でヒントを与えたり、子どもに考えさせたり、さらに手助けをしたりしてお城を造っていた。これらの教師と子どもとのやりとりをし、積み木遊びを展開する様子は、まさしく相互作用といえるであろう。子どもだけに任せていたならば、今日のねらいは達成できなかったであろう。

③も同様に、教師が子どもたちを導くそれが教師の役割であると述べている。ここに表現の教育の意義が見出されると考える。つまり、教師は子どもが自分でやりたいことを助けること、導いてやることこそが大切であると考えられる。

④については、今日の遊びのように、教える必要があるときには教師と一緒に遊び、手助けをしているのである。

⑤については、5・6歳児は遊びによっては常に教師がついているわけではない。今日の遊びのように、教える必要があるときには教師と一緒に遊び、手助けをしているのである。

⑥については、重ねて教師の役割について、今日の保育を振り返りながらの言葉であった。教師が今日の保育を反省評価し、明日の遊びへと予想をたてられるのは、日々の保育はもちろん第二章のヘーン園長のインタビューからもわかるように、フレーベルの思想に基づいて、教師が保育を展開していることがわかる。

以上、フレーベル幼稚園の保育参観ならびに担

任の Hannelor Beyerlein 先生へのインタビューから、表現の意義について三つのことが明らかになった。

第一に、幼児期における遊戯の大切さである。子どもたちと先生が輪になって、幼稚園の歌をうたい、動作をつけて歌うこと、ただそれだけで楽しい気持ちが伝わってくる。園歌の歌詞の意味からも、楽しい幼稚園生活からも、一週間の子どもの様子が見えてくるものであった。幼児期は特に先生と一緒にということが大事であると捉える。

第二に、子ども自らが遊びたい遊びを自己決定することである。子どもが自己決定することの重要性は、周知のところである。しかし、人が人になるために、より高いところを目指すこと、それが教育である。子ども自身の生まれもったものみに任すのではなく、子どもがやりたいことに向けての方向性を、先生が示すことは重要なことであると考える。

第三に、教師の役割の重要性である。教師は保育の「ねらい」を明確にし、子どものやりたいことを助けること、ヒントを与え導くこと、助長すること、援助すること、そして促進することが大切である。そして、子どもたちをその方向へ導いてやるのが教師の役割であると再確認をした。そのためにも、教師の資質が大きく問われることになるのであろう。

教師の認めについては、子どもの成長や発達を見極めながら、教師も手助けをし、その都度、認めることで、子どもたちはさらに表現することの喜びやまた、挑戦してみようとする気持ちを沸き立たせるのである。そして、遊びを拡げ、完成へと向かっていくのである。

さらに、他の教師や子どもたちが、お城のできあがりを見て感心すると、子どもたちは完成への喜びと、ほめられる喜びで得意げであった。今日作ったお城はそのまま片付けることなく、雪解けの園庭へ飛び出していった。誰一人、積木を壊したり、壊そうとする子どもはいない。遊びが満足できるものであったからであろう。

担任教師への質問から、積木で十分遊び、教師

や友だちに認めてもらうことで、さらに次の表現する意欲を高めることを再確認した。

ねらいについては、遊びの課題が明確である。子どもと教師とのやりとりをし、積木遊びをする様はまさしく相互作用といえる。子どもだけに遊びを任していたならば、今日のねらいは達成できなかったであろう。担任教師は、教師の役割について、何らかの助言を与えて教えなければならない。ここに窓がある。長さを、高さを、など、教師は示していくことが大切であると述べた。

今回の保育参観は、一日のみのそれも限られた時間のものであった。その上に、インフルエンザの流行で子どもも教師もお休みが多く、この参観がフレーベル幼稚園の全てとは言い難い。しかし、担任教師は保育のねらいをもって、遊びを展開し、その後、保育を省察し、明日への遊びの予想がたてられるのである。日々の保育は勿論フレーベルの思想に基づいて、教師が保育を展開しているのがわかる。

3. おわりに

本研究では、「人の教育」の中から表現に関する論説を手がかりにし、フレーベル幼稚園の実践を通して、幼児教育における「表現」の意義を明らかにしたいと考え研究に取り組んだ。

フレーベルの「人の教育」に示された表現の教育については、事物の本質を表現させ、自然の事物の生命や意義を知ろうと努力することこそが教育であり、生涯の人生を決めるべく幼児期の表現がいかに生活の中で育まれるかが重要であると捉えた。本質を表現させることがまさしく表現の根源的な意義であると考えた。さらに、子どもが外界に働きかけ自己を表現するには素材が必要であり、教育的遊具 (Gabe) を使って子どもの活動、形成、表現衝動を育むことと捉えた。

幼児教育は「与え」「与えられる」関係、まさしく恩物 (Gabe) といえるだろう。なぜなら Gabe は Gift つまりプレゼントだからである。プレゼントとは「与え」「与えられる」ものであると解釈する。教師と子どもの関係は Gabe の関係でありたいと考える。そこから、より高い表現の

意義も見出されるのではないかと考える。

日本ではフレーベルの幼児教育思想は明治初期に伝えられた。一定の時期には日本の幼児教育界に多大の影響を与えたのは確かである。しかし、フレーベル思想の批判が巻き起こり、フレーベルはもう古いという風潮になったことは否めないだろう。

筆者はフレーベルが幼児教育思想を構築し、実践したバートブランケンブルクを訪ねた。そこで、フレーベル博物館、現在のフレーベル幼稚園、そしてフレーベルゆかりの地をつぶさに見てきた。するとそこでは、フレーベルの著作そのものを実践しているのではなく、フレーベル思想の根幹を現代の状況に合わせるように、つまり、継承発展させながら、現代も実践が行われていることがわかった。

我が国では、フレーベル思想を原理主義的にそのままやろうとして、フレーベルは過去の人だと捨ててしまった向きがあるのではなかろうか。しかし、フレーベルの地に行き、フレーベルの思想をそのまま保育に取り入れるのではなく、彼が目指したことを少しでもより現在に即して実践活動をしているフレーベル幼稚園があることに驚きを感じた。

フレーベルが目指そうとしたその先を、フレーベルに導いてもらいながら、新しくフレーベルを見つめ直し実践していきたい。

そこで、現在のその実践化として、フレーベル幼稚園ヘーン園長並びにフレーベル博物館ロックシュタイン館長へのインタビューから、ものや出来事を媒介にし、また、人との関わりにおいて子どもは表現していくこと、そして、表現するまでの過程が大切であること、さらに、子どもが表現することの意味を理解すること、つまり、教師の資質が問われていることが再確認された。

本号では、前号、前々号を踏まえ、フレーベル幼稚園の保育実践を観察して、表現の意義は次の3点にあると考える。第一に、自己決定である。積木遊びで教師が本日のねらいをもって子どもと話し合い、その中で子どもが遊びたいことを自己決定している姿が見られた。遊びの中においても

教師の助言やヒントなどから子どもが自ら気づくことができるのである。

第二に、自己発見・自己認識である。子どもは、自分自身の力で自己の内面を自分の外にある遊具や自然物や物を通して表現し、形造ろうと努力することであり、自分を知らうとする、つまり、自己を発見し、自己を認識しようとする。さらに、教師の助言やヒントなどから物をしっかり見ようとする力や、真実を知ろうとすることとなる。つまり、子どもが表現したものを意識化させ、子ども自身が何を造ろうとしているかを確認している。また、教師の言葉かけで、子どものおぼろげなる記憶を呼び覚まし、確かな真実を見る目を育てている。これらのことは保育を通して、子どもに自己を認識させることとなるのである。また、友だちとイメージを共有し、友だちとの関わりや一緒に協力し合ってお城を造る中から、互いの表現を見ながらさらに自己を認識し、自分らしさを出して表現することになるのである。

第三に、自己の世界を拓げ、人間として成長していくことである。積木遊びの中で、教師は何度となく認め言葉子どもたちにかけていた。認められた子どもたちは、次の課題へと意欲を持って遊びを拓げていく姿が見られた。長さや高さそして接合部分をも意識してお城を造っていた子どもたちは、教師の言葉かけやヒントからお城の周辺にある人やベンチや草や木そして動物などへ認識を拓げ自己の世界を拓げていくのである。

以上のことから、自己を決定し、自己を発見し、自己を認識し、また、社会を認識し、さらに世界を認識することとなり、これらがらせん的に循環していくことで、子どものさらなる成長へと導くのである。表現の意義を踏まえた上で、子どもの表現する力をいかに培うかを考えることが、表現の過程を大切にしていくことともつながるのである。

ドイツのフレーベル幼稚園を訪問し、フレーベルの理念を継承しながら幼児の「表現」、つまり、「人の教育」は「表現の教育」と捉えて実践している保育を観察した。フレーベル幼稚園ヘーン園長並びにフレーベル博物館ロックシュタイン館長

が今も、フレーベル理論を継承流布していることの意義を深く考えさせられた。今後の幼稚園の方向を見据えながら、保育内容領域「表現」に掲げられている「ねらい」を深く受け止め、それぞれの幼稚園がより工夫をこらす時期ではないかと考える。

〈引用文献〉

- 1) Gisela Hoehn, 児玉 斗 訳, AWO – Kindergarten “Froebelhaus” 要覧. 2009,

〈参考文献〉

1. Joachim Liebschner, A CHILD’S WORK – Freedom and Play in Froebel’s Educational Theory and Practice –, 1992, The Lutterworth Press
2. Margitta Rockstein, Kindergarten, 2004, Herausgeber: Vereinigung der Freunde des Kindergartens e.V., Förderverein des Friedrich-Froebel-Museums und Margitta Rocktein
3. H・ハイラント小笠原道雄・藤川信夫訳, 『フレーベル入門』, 1991, 玉川大学出版部
4. 岩崎次男, 『フレーベル教育学の研究』, 1999, 玉川大学出版部
5. 小原國芳, 荘司雅子監修『フレーベル全集』 第一巻～第五巻, 1976, 玉川大学出版部
6. 小笠原道雄, 『フレーベルー人と思想―』, 2000, 清水書院
7. 菊池ふじの監修・土屋とく編, 『倉橋惣三「保育法」講義録―保育の原点を探る―』, 1990, フレーベル館
8. 柴田義松・斉藤利彦編著, 『近代教育史』, 2000 学文社
9. 名須川知子, 『唱歌遊戯作品における身体表現の変遷』, 2004, 風間書房
10. フレーベル著・荒井 武訳, 『人間の教育』, 1964, 岩波書店
11. 文部科学省, 『幼稚園教育要領解説』, 2008, フレーベル館